

# ボランティア体験：その動機と実践（上）

（日本・メキシコ比較研究に向けて）

阿波弓夫

## 序文

東日本大震災（3・11）から約8ヶ月経過した昨年（2011年）の11月初め、筆者は岩手県宮古市で被災者支援を目的とする所謂ボランティア活動に係わった。本稿はその行動の発端となった傾聴ボランティア（日本・メキシコ）に関する、ささやかな体験的記録である。筆者は元来、ボランティアには適齢期があり、それ以上でもそれ以下でも任務の完遂は困難だろうと慎重な考えであった。現地で他のボランティアの足手纏いになったり、帰宅後体調不良に陥るなど体力的に予測しがたいものがある。そうした心理的葛藤の狭間に、「傾聴ボランティア」というボランティアの一型態のあることを知った。そのことがきっかけで筆者は行動を起こし、実際に被災地の一つを訪れることになった。それは声高に言うようなものではなく、他言すればむしろ物見遊山との誹りを受けても仕方がない軽薄なる行為かも知れない。自己分析的に言うならば、被災しなかった者の被災した者たちに対する「後ろめたさ」を軽減するための、単なる気休めとも言える。しかし、窮地にある者に救いの手を思わず差し出す行為は、理屈で説明のつくことなのかどうか。理性で考えて行動する以前に、身体的なりアクションが先行する、そうした事態は非常時には特にありうる。それは一つには被災者に対する「思い」というものであろう。結果的に他人の足手纏いになるかも知れないが、ただ「思い」だけで身体的に理屈抜きの行動に出てしまう、そういうものがボランティアではないかと思う。しかし、こうした抽象論とは全く別次元の、単純な事実気付いたことで事態は百八十度転換した。それは傾聴ボランティアとの出会いである。体力勝負のがれき撤去作業と比べて、これなら筆者でも何か出来る。そのように思うとボランティアは急速に身近なものになった。人の話しに耳を傾けることは簡単ではない。自分の心の声に耳を傾けるのが難しいのと同じくらい困難なものかも知れない。しかし、耳は人間や動物の身体器官の一つ聴覚ではあるが、これを「傾ける」ということは実に人間的行為であってそこでは「他者」が想定されている。他者とは森羅万象全てである。当然自分の内なる声をも含む。そこに耳を傾けることの難しさがある。他者の話しを聞くと、普段無意識であるだけに、異化作

用が生じるのもそのためだ。「傾聴する」という行為自体は、例えば高齢者の話し相手になるといったことが古くから行なわれているし、ゆったりとした時間の流れる地方に行けば、まだ傾聴的な行為として高齢者間の集いの場が残っている。人間は元来誰かに受け留めてもらいたい存在である。人間はパスカルの言うような「一本の葦」<sup>注1</sup>ではない。誰かに受け留められる、パスカルの言葉を用いれば、「包み」<sup>注2</sup>こまれることによって人間は生の重みに耐えられる。極限状況において気晴しのないままでは、生の重みが人を押し潰す。これが近代の人間だ。

他方、「傾聴ボランティア」と出会ったことで、過去の行動の中に同様の「思い」の流れることを自覚することになった。時系列的に言うと、メキシコ地震（1985）その後の被災者に対する聞き取り行為、阪神淡路大震災（1994）での救援物資の搬送、2002年ワールド・カップ（日本・韓国）への無償協力、である。筆者はこれまでメキシコ大地震での行為をもっぱらジャーナリズム上のそれとカテゴライズしてきた。そのことに何ら疑問を抱くものではなかったため、他の無償協力、支援活動とは明確に一線を引いてきた。傾聴ボランティアは、これらを一環した「思い」から発する各種の表現形態と再認識する契機となった。

本稿では、ボランティアとは何か、どうあるべきか、といった用語規定や倫理的な課題の追求を主目的とするものではない。むしろ、一人のボランティア体験者から見た被災者、被災地の断片（ワールドカップの場合は、試合までの準備過程）を記録することにある。しかし、現実的に、東日本の被災者の状況が長期化し、かつ深刻化することが確実視される今日、ボランティアへの期待は一層深まる。そのとき、ボランティアが何よりも各自の内面の問題であることを再認識し、それぞれの原初の「思い」に立ち戻ることが是非とも必要となる。本稿は、そのためのささやかな自省的行為でもある。

## 第1章 ボランティア活動とその動機

ボランティアに係わろうとする人の動機は千差万別である。ボランティアは常に個人の内面の問題であり、また自己責任の世界だからだ。先述の通り、筆者は過去30年の間に、今回の東日本大震災に伴う行動も含めて4回ボランティアのような行動を執ったが、その際の気持の在り様、即ち「動機」に関して極めて鮮明に記憶に留めている。改めて振り返ると、一貫した思いが流れていることに気付く。それは、具体的に何をしたかよりも、そうした行動に踏み出すまでの自問自答の様が鮮明に残る。一種の身体感覚の境位にあるものと言える。大惨禍からの復興の規模や期間が予測しがたいものとなるほど、ボランティアへの依存程度も、規模も未曾有のものとなる。従って、政策的に組み

込もうとする行政や現地自治体の関心も当然高まる。ところが、先述の通り、ボランティアは極めて精神性の高い人間性の問題という性格上、矛盾に直面することになる。制度化のための手段、措置がどんなに講じられようと、そこに何らかの成果を見出すにはボランティアの原初が内面の、理屈抜きの世界を離れてはありえないように、最終的には共同体全体の精神や文化の問題と深く連動することを理解すべきだ。筆者個人の、ボランティアを決断するまでの心理過程、その動機は千差万別であると先述したとはいえ、そのもっと深い部分には共通の思いが流れるという一抹の期待を抱くことを、多少の矛盾を承知の上で明らかにしておきたい。

## 第2章 ボランティア：自律性と変貌

### （一）東日本震災の後で

筆者は地震のとき、東京の西部、埼玉県寄りの十二階建て高層マンションに住んでいた。平時なら、単なる過剰反応として一笑に付していたものを、絶えまなく襲う余震に築40年の建物がいつまで耐えられるか恐怖心に付き纏われた。さらに、福島第一原発の事故が制御不能に陥った時、東京がどのような被害を蒙るか、情報「錯乱」の下でかつて経験したことのない危機意識に呑み込まれそうになった。そこで私と家族は地震の翌日から10日間、名古屋と大阪に緊急避難したが、結局、東京での新たな現実を受け入れる覚悟を決めて東京に戻ったのである。五月に入って日々の生活も仕事も普段どおりに滑り出すと、かつて心にした目の危機は徐々に薄れていく。東北三県や福島の人々の蒙った人的・物的被害の実態が明らかになっていくとともに、彼らの悲惨と自分の安堵感その間に一つの境界線を引かせるのだ。その境界線のおかげで、あるいは、それが原因で原初の未曾有の危機意識が抑え込まれることになる。こういう意識の有り様が基本的にボランティアに係わる昨年11月初めまでの通奏低音であった。新聞とラジオが筆者の情報源である。大震災最初の夏、ボランティアが被災地にがれき撤去行動に参加した、と報道が詳細に伝えている。しかし、自分自身とボランティアを結び付けるまでには至らない。被災者に同情するが、都市の壊滅状況を知ることについて、一個人の協力が、どれ程の規模で拮抗しようと、すぐさま事態の好転に結び付くことはない。もはや事態は個人の参加では対処できない段階にある、という一種の思い込みに安住していた。この考え方は、その8-9月に諸々の現実があつて、個人的に心の余裕を失っていたことに対応する。やっと10月になって個人的に逼迫した状況から脱け出せた。すると再び東北が気持の中心を占め始める。震災前、連続的に旅行した北の情景が思い浮んで、それらがことごとく震災で歪んで漂うようだ。平泉、出羽三山、そしていずれ訪れる予定だった

東北の松尾芭蕉が歩いた土地、茨木の水族館、岡倉天心の五浦、など。そこで世話になった人たちに送った安否の手紙にも応答のない喪失感。もしそのとき、あの路線を走っていたら。もしそのとき、あの海側のホテルに泊っていたら、自分らにも被災する可能性が十分にあった。そういう意識がどんどん膨れ上っていった。これは決して他人ごとではないのだ、偶々自分らにではなく、他の人たちに降りかかったもので、彼らを助けることは自分を助けることなのだ。そのように思い直すと、いよいよ焦燥感が高じる。パソコンで被災地のホームページを開き、支援物資として必要とされているものを調べた。送れるものは送った。避難所に直接届くようにした。結果的に言えることは、10月に入って被災地と直接繋がりたいという気持が強く、積極的に動き始めた。各市町村のホームページに行き着いて、被災地の状況、復興の現段階、ボランティア動きなど、その一端を読んだ。ボランティアはがれき撤去行動が最も求められている。しかし、一時の激情で参加しても、現実には役に立たないだけならいいが、現地に迷惑でもかけたら……そういう危惧心があつて厳しく自重するしかない。そういうときに、宮古市のホームページで「傾聴ボランティア」を求める情報を得た。そんなボランティア行動があるのだ、という驚きに近いものを感じた。それなら何か出来るかも知れない。今までもそれに類似の行動を起こしたことがある、等々、突然いろいろなイメージが噴出してくる。メキシコ地震の際の経験も蘇る。東日本大震災がもう過去のものとなっていたメキシコ大地震を記憶の中に呼び戻したのだ。それ以上に意外なことは、その時の自分の行動が、後述するが、全く異化され、改めて検討するよう考え方を切り換えさせた。これが本稿の直接のモチベーションであることは先述のとおりである。しかし、誤解を招かぬように、本稿の主目的を敢えて繰り返すが、傾聴ボランティアに関する日本とメキシコの比較研究ではない。傾聴ボランティアと今日呼ばれる、一種の救援行動を筆者が日本とメキシコの双方で経験した、その際の個人的な動機を、さらに被災者、被災地の状況と実際行動あるいは、支援対象・場での実践内容など、その後の比較研究の「原資料」、あるいは記録として産出することを主目的としている。このような個人の行動の動機やその記録が必要である背景には、人間がこれまで未曾有の災禍を契機に自然との共生を模索しつつ、自己展開の在り方としてそれを受け入れてきた、文化としての「生きる知恵」をいかに積み上げるか、という問題がある。ボランティアという言葉もその好例である。この言葉が今日、日本語化しているのは、我々日本人が大惨禍に次ぐ大惨禍の経験を共有するなかで万人のうちに自ずからその必要性が認識され、その言葉が日本の現実によって裏打ちされ、誰もがそこに共通の思いを込めるに至った、即ち共同体験を意味する言葉に転化した、ということなのだ。傾聴ボランティアという言葉もこれと同様である。

今まさに市民権を得ようとしている。即ち、本稿の課題は、換言すれば、この言葉が市民権を得る上での経験上の試行錯誤に参画する、ということなのである。

ここで再び宮古市での傾聴ボランティアにたどり着くまでの経緯に戻るが、筆者の意図するところは、その道のりが決して近くなかったということなのだ。現地に連絡すると、志願者の在住する市町村の社会福祉協議会で手続きしたボランティア保険加入の証明書を取得した上で、現地の社協に提出することになっていた。その証明書は身分証明書を提示して申告書に記入すると、その場で発行された。日帰りのボランティア向けの高速バスツアー通称「弾丸バスツアー」がある。これは福島県や近隣諸県での除染作業などの参加者用である。しかし、東北へのボランティアには日帰りはない。バスか新幹線で行き、各自が宿泊先を確保することになる。同地域に親類縁者ないし知人宅を持つ者には、一応条件が整うが、それ以外宿泊先がなければボランティアは無理である。震災直後は車で現地に直行したボランティアが中心だったろうが、頭が下がる。遠方からのボランティアには東北のハードルは高い。現地の復興対策課で宿泊施設の状況を問い合わせると、営業中のホテルは三軒のみ。電話をすると、その内の一軒のみ空室があるとの返事が返ってきた。現地に出発するには、あと一つ重要なことがある。食糧の確保である。結局これは取越し苦労だったことが現地に行ってみて分かったが現場の仮設住宅に行く際には、食料の用意は自前である必要がある。最悪の場合を考えて2～3日分の食料（インスタント食品が中心）を大型バッグに詰め込んだ。以上のように、準備作業は観光旅行では想像もつかないほど煩雑だが、現地までの交通機関は何ごともなかったように、実に楽だった。東北新幹線で盛岡まで3時間弱、バスで宮古市まで3時間。スピード感だけは震災前と変らないが、現実とは別世界なんだろうと想像した。

## （二）阪神淡路大震災（1994）の後で。

この大震災が日本で最初の大規模なボランティア行動のきっかけとなったことは記憶に新しい。被災者の多さ、多様性や緊急性において制度的な救助では対応しきれなかったからだろうが、多くの人が理屈抜きで駆けつけた。無名の市民が無名の被災者を助けに入った。筆者は地震から3日目に神戸・元町に入ったが、電車は途中までしか運行せず、数時間徒歩で続行した。道すがら倒壊した大屋敷のガレキの中に柱時計やフランス人形など散乱する、生々しい現場を目の当たりにして、メキシコ大地震のその直後を思い出した。徒歩で現場に向う長い人の列、しかも誰も彼も重そうに黙々と荷物を運ぶ、その後ろ姿が記憶に残る。偶然走ってきた「無料」バスに飛び乗ったが、最悪の場合、助けるはずの知人に助けられることになっていた。彼に地震直後無事を確認したところ、

「兎に角水、水が無い」とすぐ応答があったので、現地に行くしかないと思った。大阪駅で2リットル入りのペットボトルを3本購入して、そこから先は無我夢中だった。当時、筆者はメキシコの民放ラジオ局の仕事を兼務していたこともあり、現地に入るのは自然な行為ではあったが、特定の友人の窮状が先ず念頭にあったことから言えば、仕事とボランティアの両方の性格を帯びるのも当然のことだろう。勿論、直接現地に行かなくとも、原稿は東京から送れるだろう。メキシコ大地震の記憶はまだ十分に残っているので、メキシコ人の地震に対する関心も高い。筆者にとっても、初めての巨大地震体験であったことと、自発的に救助活動に入った若いメキシコ市民が多かったことが印象に残っていたこと、これらが自分の職務を越えたところで行動する要因となったように理解している。筆者にとり、ボランティア行動のうちに、むしろ平素の自分からは予想し難い衝動性が不可欠だと考えるので、あくまでボランティアのよう<sup>な</sup>という限定付きではあるが、自分のボランティア体験の一つに加える所以である。

### (三) 2002年ワールド・カップ（日本・韓国）まで。

筆者は、2002年のワールド・カップに公式にボランティアとして参加した。この場合、筆者にとり必然とも言える動機があった。中学生のとき、遊びでボールを蹴ったことがあるので高校生になってサッカー部にしばらく在籍したことがある。ライトウイングに配置され、ゴールを入れたときの感触がまだ体に残る。これが原因でボランティアを志望したのではないが、サッカーへの好意は普通以上ある。決定的な原因は、スペイン語講師としての自分の職業である。当時、スペイン語の講師歴も10年目に当たっていた。その間、サッカーのおかげでスペイン語の需要がある、という意識が常にあった。学生たちのスペイン語選択理由の最大のもはサッカーである。特に、男子学生の場合、その傾向はワールドカップまで年々強まったように思う。従って、あの苦労の末の爽快感をスペイン語学習のそれとアナロジカルに関連付けて、学生たちを励まし集中させるのが講師の常套手段。サッカーによるスペイン語の異化作用である。開催まで残す一年という頃、日本のWC主催者側から、日頃の恩恵に感謝するならということか、学生たちにボランティアの協力要請が届いた。筆者も、受講生たちに参加を呼びかけた、スペイン語を実践するチャンスだ、と。しかし、あるとき、学生に薦めるのはいいが、自分のことは埒外に置くというのは矛盾ではないか、という内なる声が出た。自分の中で発想の転換が生じたのだ。その声に従って手を挙げた。横浜の本部から面接の通知が届き、浦安の市民ホールに集合した。20代、30代の人たち5人に混って面接を受けたが、「不採用」の方を内心期待していた。若い人たちが多いので安堵感が湧いたことにもよる。ボラン

ティア志願の理由を聞かれたので、スペイン語で役に立ちたい、と日頃学生たちに吹聴することをそのまま言った。それから一ヶ月のちに結果が届いて、新浦安の方にあるサッカー会場で試合当日設置されるプレスセンターにおいて活動する通訳班に所属することになった。しかし開催までのおよそ一年、ボランティアの「研修期間」となっていた。大会場に4-5度集合を命ぜられ、講演を聞きフランス大会でのボランティアの活躍振りを映像で観賞したり、様々なメニューが準備されている。研修最終日はサッカー会場に大結集し、そこで各班に分かれて仕事の段取りが紹介された。一番最後にサッカー大会のボランティア専用ユニフォームが全員に支給されたが、豪快な物量作戦には戸惑った。公式ユニフォームから、ズボン、運動靴、までわれわれボランティアはWカップ協賛企業の広告塔になった。筆者の場合は、「スペイン語」と書かれたワッペンを胸に付けた。勿論、顔写真入りのIDカード、これは常に首にぶら下げるよう指示があった。これが本番を迎えるまでにわれわれが越えねばならなかったハードルである。ここではボランティアは突発事態に、出来る者が体一つで飛び込む世界ではない。教育され、指導され、管理され、運営され、そして有能なボランティアとして育て上げられる。周回な計画の世界である。

本稿の主題から直接関係ないので、試合当日（全3回）の通訳班の活躍ぶりについては割愛する。大会が終わってからしばらくして、また通常の試合にもボランティアをしませんか、という誘いだった。私のボランティア感覚から見て次元の異う話なので辞退したことを付言しておく。

### 第3章 傾聴ボランティアの現場から。

宮古市のボランティア活動は朝8時から始まる。社会福祉協議会の入る庁舎ビル前の駐車場が集合場所である。前日の夕方、予約したホテルに荷物を置いて、すぐさま場所確認のため社協を探し歩いた。30分近くあった。宮古市を流れる女川が同市を海側と内陸側に区切る。その広大な河口脇に同庁舎ビルがあり、津波がそこを猛烈な勢いで逆流しながら両脇に並ぶ民家を次々に呑み込んで持ち去った。目の前には標高4-500メートルの低い山並が走り、その反対側に海がある。われわれには観光気分は絶無である。頭の中は被災者の想像上の顔だけだった。仮設テントに長テーブルが2つ。そこでボランティア登録を済ませる。ポツリポツリとどこからともなく人が現われて、25、6人のボランティアが集まる。短いスピーチで社協からボランティアへの注意事項と本日の現場に関し説明があり、それが終ると朝のラジオ体操が始まった。そのあとボランティアの名前が呼ばれ、がれき撤去班、傾聴班に分けられた上、それぞれ現地までの送迎車が割

り当てられる。筆者は二人のボランティアと共にライトバンに乗り込み社協を後にするが、東京から傾聴ボランティアとして連絡済みだったので、がれき班に行く心配がなくひと安心だった。同市の仮設住宅は60ヶ所ほどある。50世帯ぐらいのところから、200世帯までその規模は大小様々だ、という。この事実は、初日の仮設住宅で集会所の世話役から直接教えてもらったことで、筆者は当初から被災者の全体的な状況把握を努めて行わないようにした。個人が、つまり一人のボランティアが行動を始める場合、全体状況については視野外に置くべきだと考える。なぜなら、一つには、全体的絶望感に対して個々人の救援努力が徒労に感じられるからだ。被災者個々人の窮状を訴える姿、それがイメージされることが大事なことだと思う。

避難所から仮設住宅への移動は夏ごろにかけて実現したが、緊急事態は遠のいたとは言え、生活の復興、再出発とはほど遠い、仮の居場所にすぎない。車が山道を登っていく途中、そんなごく当り前のことを考えていたが、それは被災者の輪郭を薄墨で撫でるようなものだ。同乗した30代半ばの男性は、「震災直後から数度来ている」と、挨拶代わりにボランティア歴を尋ねると教えてくれた。岩手県の内陸部から、ということで話しは弾まないのが、普通の旅行者同士との大きな違いだ。松林の間のちょっとした隙間に、まず彼が降り、そのあと数分のところで筆者は降車した。スペース的には、学生のワンルームマンションよりやや大きい目の住宅が何軒かずつ連結してユニットを成し、それが碁盤目状に並ぶ。2メートル位の幅で石畳が走る。ごみもがれきも、その他生活臭を残すものはない。仮設住宅には各々名称が付いていたが、全く記憶にない。社協の方針は、無名のボランティアが無名の被災者に対して支援する、そうした場をコーディネートすることだけ、のようだ。要するに、互いに後に何らの人情的な絆を残さない。ボランティア行動の原初の在り方を守る面から納得できる。仮設住宅の区域に入ってすぐのところ集会所があった。平屋で、5~60人が集える位の広さはある。「3時ごろまた迎えに来ます」と言って運転手役の職員が立ち去ると、具体的な指示を一切受けていないのでちょっと戸惑う。ボランティアなのだから、誰かの指示があるはずはないのだが、気持としては誰かに背中を押してほしい。「行動開始!」といった気魄は全くない、というか深く熱く低くある、ということだろうか。他のボランティア体験者の、「その時」の心境を訊ねてみたいものだ。工事現場の仮設事務所によくある入口だが、開けてなかに入ると、この「仮設サロン」の「支配人」である管理人Mさんが声を掛けてくれた。旅館の畳の部屋という印象だが、真中に長机、奥の方に大型テレビ、それに尽きる。入口付近には小さな本箱があって、駅の売店でよく見かける小説、単行本類が並んでいた。住民同士が歓談する輪から輪へと渡り歩いて、自己紹介しながら、相手の気分に委



ねるように話を繋ぐ。話しの仲間入りをさせてもらいながら他所者の特権を発揮する。これが傾聴ボランティアの最初のイメージだが、森閑としたそこで早くも崩れた。午前の早い時間のせいなのか、管理人以外誰もいない。彼女は30代後半の女性で、物静かな人だ。取り敢えず自己紹介して、ボランティアの動機を話した。なんとも珍妙な話したが、他に話題の振り様がない。旅館に着いて、その女将と軽口をたたくようなわけにはいかない。兎に角、無意無欲、無色透明の気持である。Mさんが私の話し相手になってくれた。ポツリポツリと話しが出る。父親は津波に攫われた。高台に避難したが、である。母親を車に乗せて、Mさんは逃げて助かった。しばらくしてから、「これが私が撮ったその時の写真です」と取り出して見せてくれた。津波が女川を遡上する荒々しいスナップ写真というより、渦の海に街区が吸い込まれる場面に似ている。それが父親を呑み込んだ海の一部であるのに、Mさんは表情を変えずに言う。どうしてそんな生死の現場を戦場カメラマンでもないのに上手に撮れるのだろうか。筆者なら撮ったとしても精々ピンボケだろうし、ただ茫然と頭に焼きつけようと凝視するのが積の山だろうに。Mさんの冷静さは今どきかも知れない、という感じ方は大発見であった。管理人の仕事は半年契約という。不公平感をなくすために、そういう措置が採られたが、手を挙げる人がいなかったそうだ。これでは生活の見通しが立たないという理由からでは、とMさんは言う。

筆者が入った日は、昼ちょっと前ごろから県庁労働局から職員が来て月一回開かれる生活相談会に当たっていた。職業訓練の斡旋、職安の相談など生活全般を相談可能ということでベテラン職員（三人）を派遣している、という。その一人、上司に当たる「知恵袋」氏も話しに加えられたのがMさんが考える住民同士の手仕事プランの件だ。新聞紙やチラシ、広告類のリサイクルを兼ねて通称「エコバッグ」をみんなで作ろう、ということだ。彼女はすでに自分で作り始めていて、サンプルを集う住民に見せている。筆者は東京の市役所で無料配布している雑紙専用の紙袋だと思った。彼女は、カラーの広告や外国語の新聞で作ると、人目に訴えてよりいい、と力説する。販路は地元の商店街にお願いして、ということだ。東京に帰ったら、英新聞を送ろうと思ったほどで、仮設住宅の人たちが集いながら、現金収入にも繋がる。Mさんは、住民が閉じこもってばかりで、なんとかせねばと、焦燥感を募らせているのだ。生活相談会の件も、全家族に案内状を入れてあるというが、面談者は午後になっても2人、3人。まだ一度も顔を見ていない住民もいて、彼女は打つ手が見い出せない。震災前に同一地区にいた住民だけなら集まりやすく、他地区の人が含まれているせいで集まれない、そういうところは少しは原因としてあるかも知れないが、特に男性はコミュニケーション下手だ。年齢とともに女性

よりも男性にそうした傾向が強まることも事実だ。しかし、年齢のせいになると、宿命論的になってしまわないか。時間をかけて提案していく忍耐力の問題ではないか。と若干異論を唱えたくなる。問題の質から言えば東北も東京も同じである。しかし、先の「知恵袋」氏は、各所の模索例と、幾つかの成功例を紹介してくれるが、管理人のMさんが半年の契約期間が経ってからも、そうした起業精神を繋いでいけるのかどうか。筆者は宮古市の被災者の、地震前の生活様態について知らない。しかし、想像するに、もっぱら海との繋がりのなかで生活してきた人たちだろうから、農閑期の家内工房の経験は薄いようだ。そこから、彼女のアイデアは、商業地のサービスとの連携を求めるものだし、それは結果的には従来の農漁村部の常識を破る可能性が強いと言える。商店街や協力者とのネットワーク体制を築き上げ、稼働させるためには若い人の意欲的な行動力しかない。しかしそれにしてもMさん、気の毒なほど孤軍奮闘している。その母親も午後合流して、ずっと娘に寄り添っていた。母親からすると、そんな娘の将来を思うと不安で仕方ないだろう、と思った。その内に昼食時間になった。職員三人は手弁当、筆者はカップ麺にお湯をもらって外気の中ですすった。そして、こういう問題は、東京でも、ここでも同じだな、普遍的だなと思うとともに、仮設の生活の中でこれを追究するMさんにはとっっても厳しすぎるものがある、と思った。第一に、山の中の仮設からではハンディが多すぎる。母親は九死に一生を得た様子をリアルに話してくれるが、思い出させてしまって辛いのだろうかとか冷や冷やした。父親を喪失した悲しみは語ることで蘇える。ただ、自然に語るのならMさんの母親のように、多少客観化できるのかも知れない。女性はリアリストだからとまでは言わないが、客観化することで、その先に向けて一歩でも二歩でも前進できる。

ただ、母親が他所者の質問に答えるようでは決して自然とは言い難い。他人の要望に応じる型での記憶は苦痛だ。こう考えていくと、筆者が当初イメージとしてあった傾聴ボランティア像は互解する。なぜなら、大勢の被災者と少しずつ、気ぜわしく話しを聞いてなど出来るものではないだろう。自然に、「強制」的にでなく話せるには、兎に角時間がかかる。特に東北の人たちはそういう文化に満ち満ちている。時間をかけて解きほぐし、深められていく在り方をイメージしていくことだろう。これは現代文明そのものへの反省を必要とすることではないだろうか。ボランティアの成果はそうした文明的な批判的視座がないと、期待できなからう。

「知恵袋」氏から、仮設住民が協力してタジェル（「工房」）を立ち上げることで、仮設住民の生活欲を引き出す一石二鳥の案がいろいろ紹介されていたが、彼ら行政側が積極的にプロモートできない「弱点」があるようだ。まず第一義的に住民内の自助努力が

優先されるからだが、職業訓練などの面から、仮設内工房へ後方支援することはできる。例えば、Mさんがエコバッグの流通化を考えるのなら、真先にインターネットで仲間作り、協力体制作りを行なうべきところであるが、彼女にはその視野が欠けているから、思考が広がっていかない。そこで思うことは、そうした現代のツールを駆使できる新しい世代が地元じっくりに根付いて、共に「離陸」する道が最良だと思った。そういう意味で、東日本被災地には今後限りなく可能性が広がっていると言わざるを得ない。全体の動きがうまくシンクロナイズしてくれば、こうした方向に自ずと目が向けられるだろうと思う。

社協の対策本部に戻ると、一日の活動で気付いたことをアンケート用紙に記入した。直接的な印象、つまりMさんの孤軍奮闘ぶり、これしか思い付かなかった。ただ、外部の人間で、しかもたった数時間というわずかの間停まっているだけの人間を拒絶せず、迎えてもらえたことに感謝するというコメントだけは忘れたくはなかった。

（二日目、別の仮設住宅に派遣された。紙面の都合で割愛する。）

今年に入り、宮古市の社協からの礼状が届いた。また、筆者の地元の社協から通知がきて、ボランティアに関するシンポジウムの開催を知らせるものであった。機会があれば再訪してみたいと思うが、おそらく同じMさんやSさんに会えることはないし、自分の内面にしか動機の所在はないので他の経験者と意見交換のしようがない。筆者はどこまでも我ままなボランティアだと思う。

#### 第4章 メキシコ大地震（1985）のあとで。

筆者のボランティア（のような）行動の根はメキシコにある。しかし、より正確に言うとうと、最近出会った傾聴ボランティアと呼ばれる行動、その体験によって、メキシコでの同種の体験が蘇ったのである。メキシコが未曾有の大震災に見舞われてから一年目、イルダという名前の女性と知り合い、偶然彼女の被災体験（被害とその後の生活）に耳を傾けることになった。その一部を物語風に再録すると以下のとおりである。

雨期に入って間もない6月のある日曜日、チャプルテペック公園は、行楽客でにぎわう。公園らしい公園だ。家族や恋人たちが仲良く、ゆっくり時間の過ぎるのを楽しんでいる人たちを見ていると、そんな風に思われてくる。食パン、唐辛子の缶詰、ハム、チーズそしてトマトとアグアカテ（アボカド）、そういうサンドイッチの材料をレジ袋ごと持ち寄る。ランチェリアが流れるラジカセを真中に仲間が車座になって、騒々しく食べている。足の踏み場もないような、賑々した雰囲気なかで、イルダが仲間外れされたように佇んでいた。日曜日に、この公園に単独で来るとは、メキシコでは考えにくい。しかも、「グエラ」（「色白の美人さん」）のイルダが、である。イルダは、「モレニタス」の多いチャプルテペックでは目立つ。メキシコの男たちはグエラが好きだ。筆者は素直にメキシコ人的衝動に従ったが、それは予想もしない現実と出会う契機となった。

(A) こんにちは。独りなの。

(B) そうよ。いくら待っても来ない。せっかくの日曜日なのに…。フラれたのね。

(A) この場所（歴史人類学博物館）じゃ、間違うはずもないしね。

(B) 帰ろうと思ってたところよ。

(A) 彼氏、なにしてるの。

(B) ガソリン・スタンドで働いてる。休みもらえなかったか、他の女性<sup>ひと</sup>のところに行ったか…もうどっちでもいいの。いつものことだから。

イルダとの会話はその辺まではスラスラいったが、彼女がなにをする人なのか、聞いてみたかったが、自制心が働いた。ただ問題は、普通の会社勤めの女性や高等教育を受けた女性が給油所の従業員と恋仲になることはない、という社会的偏見めいたものが筆者の知識の内にインプットされていた。ある日系企業に美人秘書がいて、彼女が地下鉄の車掌と婚約すると言うので、日本人の上司たちはこぞって反対した、という。君のような美人<sup>ひと</sup>ならもっといい縁談に恵まれるのに、と彼女に結婚を決めた動機を尋ねると、「彼がグエロで、セクシーだから」と即答した。われわれセクシー度に欠ける日本人の顔面に強打を浴びせた。かつてこのエピソードに痛く感動したこともあるので、あつものに懲りてではないが、ガソリンスタンド男の魅力を聞いて同じ返答が返ってきたらと思う

と気持が萎えたのだ。すると「日本人は無口なのね」とお喋りを促す。数年前から生やし始めた口髭の威力に与かって見ず知らずのイルダに声を掛けてみたものの、間断なく話すノビオスの得意芸を修得しているわけでない。彼女にしてみれば、自分に興味があって話しかけてきたのだから、その男が黙ってしまうのは解せないわけだ。筆者の頭の中には、「ゲリータ」、「パンタロン」、「30近い未婚の女性」「ガソリンスタンドの彼氏」「馴れ馴れしい言葉遣い」という彼女をめぐる文化的記号が渦を巻いて謎解きゲームを楽しんでいる。チャプルテペック公園は国民的な広場。特定の、熱い共生振りを発散させる若い人たちが多く、目立つ。特に外国から来た者には異質なものの代名詞になり易い。そういうところから、「メイド公園」と茶化す人が筆者の周りにもいたが、多分にそういう地方出身の若者たちの、「コンビビアル」をそれと知らずに実現している彼（女）らへの嫉妬のせいだ。イルダがメイドであることにはならないし、ましてや彼女はゲリータ。ゲリータがメイドをする確率は極めて低い。メイドなら、地方出身者、スカート、サンダルが大方のスタイルだが、イルダはパンタロン、加えて靴。しかし、原色のセーターが色白の肌を際立たせてはいても、おシャレが身に付いてない感じなのだ。三十才近くまで独身を通すということは、一度や二度の結婚歴はあるだろうが、高等教育を受けたキャリア・ウーマンにしか享受できない特権である。また、地方出身者なら、マチズムの餌食になって、映画「ベンハミンの女」の中のナティビダのように、若くして人生の甘さ辛さを知り尽した、図太さを備えているだろうから、男への対し方がもっと屈折していてもいいはずなのに、イルダは多少世慣れたところはあるとは言え、笑顔に屈託がない。キャリア・ウーマンならゲリータ、それにパンタロン姿というのも納得いくが、ガソリンスタンドの彼氏と彼女の間には社会的落差がありすぎ、彼女の自尊心が許さないだろう。

イルダの話を上の方で聞いていると、バスが停った。日曜日の昼食どきのせいか、乗客は少なかった。運転手に五百ペソ札を出すと、釣り銭はない、という。料金箱から小銭を出せばいいものを、と思っていると、「我々は鍵を持っていない」、と不愛想な応答に阻まれた。鍵付きバスが出現して、メキシコから融通性が消滅しようとしている。乗客がわれわれをじろじろ詮索するように見るのが癪に触った。コレクティブ（「乗合いタクシー」）の方で行こうと、何台が満員のを見送っていると、小雨がパラついてきて、アツという間に豪雨に移った。最近、バス停に屋根が付いたが、豪雨を計算に入れてない。ズブ濡れは時間の問題だった。イルダはお喋りしていればその内に降り止む、という雰囲気構え。筆者は、雨に濡れると風邪を引く。風邪を引けば薬局か病院に行くことになる。費用もかかるし、仕事に支障をきたす等々、先へ先へと事を突き詰め

る。そういう悲しい性分に引きずられて、焦燥感が走る。不意にタクシーでも、コレクティでもない車が目の前に停止したのだ。窓ガラスは曇っていて、車内の様子は何も見えない。助手席の窓ガラスが少し開いて、若いグェリートの顔が半分だけ見えた。予想もしなかったことだが、「そこまで送りましょう」と、声を掛ける。通りがかりの、全く見ず知らずの人間が、なぜわれわれにだけ特別の好意を寄せるのか、解せない事態だった。当然の雨に困まる人間のスキに乗じて車に誘い込んで身ぐるみを剥ぐ、そういう悪夢が頭を過った。しかし、彼の表情には不信感を与えるところがなく、拒絶しがたいものを感じた。警戒心の段階から、運命に賭けるまでの心理の変化を説明するのは難しい。理屈ではどうにもならない次元の問題なのだ。なんとなくメキシコ人のことを根っ子の部分で許してしまっているからだと思うが、筆者に声を掛けられ不審に思わず一緒に来てしまうイルダの深層心理と相通じるものがある。イルダは怯えた表情をするので、「空手知ってるから大丈夫」とジョークで宥めるが、本当のところメキシコ人の言うところの「驚か太陽か」の心持ちだった。実際のところ、香港映画でよく見る「空中殺法」どころか、回し蹴りも出来ないし、拳銃でも突きつけられたら「命ばかりはお助けを！」と嘆願するのが関の山だ。

車中の主は、メキシコ人親子だった。あのハムレット的葛藤は何だったのか。彼らの親切心が身に染みだ。その車は日本車だったが、大型の「アメ」車と比べて4人も乗るとスペースに余裕がなくなる。濡れた衣服が相手に触れるので、不快感を与えはしまいかとヒヤヒヤした。車の主たちは物静かだ。特に何かを聞きだそうという風でもない。メキシコの、ゆったり鷹揚な中流家庭の空気感があった。今しがた見学してきた博物館の印象を話すと、じっくり耳を傾けて、「それはよかった」、「我国の良さを理解していただき光栄です」と親子ともに相槌を打つ。イルダはその雰囲気にも馴染めないらしく、体を固くしている様子だ。

ハンドルを握る父親が「お住まいはどちら」と尋ねると、筆者にははっきりと聞き取れたのに、彼女は何故か「マンデ (Mande) !」と一旦聞き直した上で、「トラテロコ (団地) です」と答えた。トラテロコ団地と言えば、メキシコ市の中心部、レフォルマ通り沿いにある高級団地、中流社会のシンボルである。イルダが同団地の住人とは、ちょっと納得がいかない。それは彼女が使った「マンデ!」という言葉遣いである。それは彼女をめぐる文化記号がもう一つ増えたことを意味する。「マンデ」はマンダール(「命じる」という動詞の命令形、つまり「命じて下さい」、「お申し付け下さい」あるいはより日常的に言って「御用は何ですか」という意味をもつ。非常に階級性の強い語感をもつ言葉であるから、メキシコで誰かれなしに使われるものでない。相手の言うこ

とを聞き直すとき、「コモ（“Cómo”）」、「コモ・メ・ディホ（“Cómo me dijo”）」、「ペルドン（“Perdón”）」あるいは、より直截に、「ノ・ロ・エスクチョ（“No lo escucho”）」という表現で聞き直される。同じ中流家庭のトラテロルコ団地住民であるはずのイルダが、まるで目上の人間に対するような言葉遣いをしたのだ。その場の雰囲気からしても違和感のある言い方だけに、彼女が日常置かれている文化を露呈していた。

筆者とイルダは、さらにレフォルマ通りを北の方に歩き続けた。インスルヘンテス通りを横切った頃から、地震の傷跡を残す建物が姿を現わす。1985年9月19日、午前7時19分。恐怖と諦めに言葉もなく平伏した、あの長い「一瞬」からすでに2年を経ようとしていた。イルダは団地の近づくと、自分の世界に戻ったかのように、生気を取り戻した。団地にはおよそ百棟が並ぶ。一日当たりの人の往来はおよそ50万人で、さしずめ副都心である。その高層ビルの大半が全壊あるいは半壊し、メキシコ中間層のステータス・シンボルも廢墟のように人影はない。イルダは人が変わったように謙虚に振舞った。彼女は自分の過去にむかって嘘はつけなかった。その時、高層ビルの屋上に住んで、区分所有者即ちトラテロルコ団地住民の家政婦をしていた。地震で全てを剥ぎ取られた被災者の一人だ、と打ち明けた。「ゲリータ」「ガソリンスタンドの彼氏」など、彼女をめぐる記号の意味が解けた。しかし、そういう知識はメキシコの主流文化を構造的に理解することを可能にするが、変化する社会をその過程の内に捉えるためにはむしろネガティブな要因となる。

彼女の住んでいたタマウリパス棟は撤去作業中だった。イルダの過去も刻一刻消えつつあった。彼女はトラテロルコが恐いと言う。かつて、アステカ帝国の都・テノチティトラン北端に位置していた同地域は、好戦的で、独立の気風に富むトラテロルカス族定住の地であったが、コルテスらスペイン人征服者たちの侵略に際し、最後まで抵抗戦を続け大虐殺の修羅場となった。それから450年後の1968年、学生運動の吹き荒れるオリンピック直前、トラテロルコ団地内の「三文化広場」で民主化のための抗議集会に向け軍が発砲、市民の虐殺へとエスカレートしたところだ。そして、1985年9月19日の大地震。同団地内、又エボ・レオン棟（二十階建て）が完全倒壊し一瞬にして住民414人ががれきの下敷きになった。トラテロルコ団地に連綿として続く「血の系譜」に住民は戦き、「呪われた場所」という共通認識がイルダたちの意識の中に定着していた。それでもイルダはトラテロルコを見ると、過去への深い郷愁に襲われる。地震からわずか一年足らずしか経っていない。しかし、彼女はこれまでの激変の日々を少し懐しむように語った。

## 第5章 イルダたちのたたかい。

イルダとその息子たちは、メキシコ市中心部から西方わずか数キロメートルに仮住する。工事現場に似た被災者用仮設住宅で、トラテロルコ用地の元家政婦屋上住民（二百十世帯、千八十人）と共に地震一周年を迎えた。その朝、デラマドリ大統領（当時）が憲法広場で一分間の黙祷を捧げ、テレビ各局は当時の大惨禍を再現していた。イルダ（31）の長女アンドレア（5）はテレビの前に釘付けになっていた。イルダは、共同洗濯場から帰って、椅子（一つしかない）か、ベッドに座って見ればいいのにと苛々した気分で娘の横顔を睨んだ。もう少しで何か言いそうだったが、無言のまま涙が頬を伝って流れ落ちるにまかせる娘の表情に気付いて一瞬自制した。

その朝もイルダは夜明け前に起きて、給水塔の水がなくならないうちに洗濯を済ませた。珍しく夜空に星の煌めく日々が続く、地震一周年前夜は美しい満月が望めるはずだったが、天候は突如急変し、激しい雷雨となった。イルダは秘かに天の怒る気配に戦き、神経が昂って寝つけなかった。地震以来、すでに日課のようにになった聖書を取り出して夢中になった。イルダの夫は、他所にも家族を持っていて地震までは週の半分通って来ていた。若い頃からある新興宗教を信仰してきたが、夫はそれを知ると激昂して無理矢理カトリックに改宗させた。聖書も開かずミサに行かなくなって数年になる。九月十九日はイルダの誕生日だった。仲間の多くが命を落とし、自分の生活も台無しになるとは、なんという不運な巡り合わせかと嘆いた。その日以来夫は通って来なくなった。神の逆鱗に触れたように感じて、かつての新興宗教に戻ろうと決めたが、聖書を貪り読む以外に自分の精神的崩壊を食い止める方法はなかった。元来、情緒不安な性格だが、地震のあとから極端になった。この一年間、ちょっとした周囲の変化にも過敏になって、娘が自分の怯えた生きざまを感じ取って同じように動揺しているのかも知れない。いつもそういう自責の念に駆られる。最初の男も、二番目の男も、男はいつも勝手なものだ。住む場所も、仕事も失って今一番必要としているときに、子供だけ残して逃げ出すとは。自分も同じように身の回りのものや子供までも捨ててしまえば、どんなに自由になれるか、フッ思うときがある。

感情が昂ぶると、そうした深層心理が頭をもたげてきて、子供の首に独りで手が伸び、思いっきり締めつけてしまいたい衝動に駆られる。そういう自分を最後の瞬間で踏み止まらせるものは一体何なのか、自分でも分からない。薄い鉄の板を貼り合わせただけの仮設住宅の一室。その真白い壁を見ていると、自分のこれまでの全てが白紙に戻ったように思う。鍋釜や食器類を無造作に積み上げた年代ものの箆笥の上に、聖書が今朝開かれたまま置かれていた。イルダは娘に気付かれぬようにそっと手に取り、静かに



閉じた。

一年前のあの一瞬から物乞い同然の生活に投げ出された自分を、まるで貧困の標本採取でもやるように根掘り葉掘り聞いていった大学の先生や学生、心理学者、教育関係者たち。いつも適当に答えてきただけで、本当のところは全てが幻のようで自分のしてきたことがどれも自信が持てない。あの時確か、渦に巻き込まれる小舟かなにかのように、目の前の建物（十四階建てタマウリパス棟）が円を描きながら揺れて、遠心力に飛ばされそうになりながら台所の入口の柱にしがみついた。恐怖に声も出せず、耳の中でゴーツという以外何も聞こえなかった。台所の壁が目の前で音もなく崩れ落ちたとき、一瞬気が遠くなるのを感じた。耳元で「ピシャ！」という鈍い音。十階の窓から飛び降りようとするセニョーラの頬を平手打ちするセニョールの怒号がなければそのまま気を失っていたかも知れない。

「すみません、子供が心配です！」、情ない習性というものか、そんな非常事態ですら家人に許可を求める言葉がつい口に出る。最上階の自分の部屋まで、6ヶ月になる長男と、アンドレアの無事を祈って一心不乱に階段を駆け昇った。その途中、目前に聳えるヌエボ・レオン棟（二十階建て）が渦を巻き吸い込まれるように回りながら土煙の海にゆっくりと沈んだ。絶叫する人の声。窓から飛び出す人の姿。本当に見たのかどうか、遠い昔の悪夢か何かのように思えて思い出そうとすると目の前に真白いペールがかかってくる。半ば錯乱状態で屋上の小部屋にたどりついた時、壁の一部がポッカー崩れ落ちてそこから、恐怖に身震いするトラテロルコ団地の各棟が見えた。地獄に飲み込まれそうになって泣き叫ぶ長男を抱き締かえ3人で床に蹲ってじっと耐えた。心が拒絶反応を起こすのか、その先のことは思い出せない、という。

トラテロルコ団地はメキシコ市中心部にある高級団地。1962年、80万平方メートルの敷地内に102棟（世帯数1万2000）の建設が完了したとき、中南米最大のマンモス団地の出現と称賛された。住民人口は9万2000人。劇場、病院等の公共施設を利用する流動人口は一日あたり平均50万人に及び、団地という共同体的雰囲気漂わせて都市の中のもう一つの都市という異空間を作っていた。だが、高層ビル群のモダンな外観とは対照的に、その深奥には60年代に始まる都市人口の急増と、それに伴う住宅難という大都市の矛盾をうっ積させていた。屋上の密集する家政婦たちの居住群は、トラテロルコ団地の隠されたもう一つの現実であった。団地の住人（通称カセロ）は、各棟の屋上に物置き程度の小部屋を所有した。中流クラス以上のアパートのシンボルとして設けられた小空間は、シルビエンタあるいは、チャチャと呼ばれる住み込みの家事労働に従事する女性に提供されるが、同団地内では多くの場合、地方出身者等に貸部屋として賃貸されて

いた。晝三晝分ほどの薄暗い空間に家財道具をつめ込み折り重なるように生活する住民の数は、地震直前すでに1万2000人にのぼり、高層建築の影に隠れた貧困の巣であった。

イルダの場合、トラテロルコ団地は住居であり、職場であった。15才のときから16年間、団地内を家事労働専門に転々と渡り歩き、その代償として住居と若干の収入を得てきた。イルダは背が低い割にはスタイルがよく、ジーンズを着ると普段の何倍も男の視線を浴びた。日曜日におしゃれをして外出するのが唯一の楽しみだった。カラーシャツを身に付けると、色白の肌が引き立って若い男たちが振り返りざまに「グェリタ！」と声を掛けるが、アソテア住民だと言うと、誰もが見下したように態度を変えた。ところが、トラテロルコ団地に住んでいるとだけ言うと、その威力は極めて有効で、男たちはみんな一目置いて決して横着に接してこなかった。

アパートのセニョールやセニョーラに気に入られている間は、全て順調に行った。住む場所の心配もなく、食うに困ることもない。くる日もくる日も家事労働を繰り返す単調さはあったが、週一度思いきりおしゃれして気晴らしも出来る。しかし、いつもトラブルがつきまとう。電話の応対が出来ないとか、文字が書けないといった些細なことから、セニョールに愛人関係を迫られるといったことまで。どんな場合でも自分が悪役にされ、気ぜわしくその場から追い立てられた。いつもこまねずみのように働く身分からして、仕方がないこと自分で納得してきたが、立場は決して対等ではなく相手の言うがままを自分の非として受け入れてしまう。そうする方が、ことを荒立てて団地全体から「村八分」されるよりはましだった。イルダはよく冗談混じりに自虐的に「トラテロルコのねずみ」と皮肉る。食べて寝る場所を求めて団地中を動き回るねずみに譬えて言うのだが、そこには天井に巣を作り怯えるねずみのように、自尊心も権利も義務意識も捨ててしまった自分に対する嘲笑の気持ちも多分に込められている。人間としての権利や生活を最低のレベルに封じ込め、それに慣れてしまえば生活はそれなりに保証されて気楽ですらある。娘の横顔を見ながら思うのは、なけなしの生活ながらそれなりに幸せと思う過去の日々だった。地震はそんな怠惰な自分に鉄槌を下すように、全てを剥ぎとってしまった。トラテロルコ団地という生活の基盤を失っただけでなく、タマウリパス棟から逃げたとき、自分の唯一の生活基盤が消滅したと思った。頼るべきものも、行き場もないイルダに、地震は重くのしかかって何かを問いかけていた。いつも裸一貫の身なのに家屋内への立ち入り禁止令が出ると、屋上の家財道具を路上で寝ながら見張った。そういうものにはしか、これからの自分と子供たちの生活の足がかりがなかったからだ。

地震以前、メキシコ市の住宅難が逼迫するにつれて、団地内の家政婦部屋住民への風当たりが強くなった。団地区分所有者（「カセロ」）は、それら屋上の小空間を賃貸住居に

換えようと一方的な家賃の値上げや、強制的な立ち退き要求を突きつけた。それは、正式な賃貸契約がないことを逆用したカセロの横暴以外の何ものでもなかった。屋上住民の必要性に応ずる形で、団地内に屋上部屋支援委員会が生まれるのは一九八七年頃からで、そこで初めてカセロと集団的に対抗することになった。住人の留守中に部屋に鍵をかけたり、官憲を導入して家財道具を放逐するなどの実力行使や、泥棒、乞食、売春婦の巣窟呼ばわりをする、反屋上部屋住民キャンペーンなど、支援委員会の結成以降、カセロ側の攻勢は一層エスカレートした。イルダは、そうした互助組織の存在を知ってはいたが、なぜか馴染めないものを感じていた。それ以前に、彼女の意識の中には「運動」、「戦う」、「権利」「デモ」、「要求」という言葉は存在していなかった。むしろ、自分を主張すること自体非日常的なことだったし、第一、そういう政治的なものにはどこか落とし穴があると思ってきた。地震発生以降、屋上部屋住民支援委員会は、従来の互助集団から、国に対して住宅保障を求めて闘う組織（「屋上住民共闘」）へと変貌した。同住民は団地の一角にある三文化広場でテント村を設営し、国内外の救援物資に支えながら対政府交渉を展開し始めた。イルダは最初、テント村に合流することに抵抗を感じ、路上で単独で寝泊まりする方を選んだ。そのうち声を掛けてくれる市民がいてその好意にすがって家事労働に従事したが、人の好意はいつまでも続くものでない。それにもまして、自分の生活や仲間は屋上部屋住民の中にしかなく、当面の安易さに甘んじてその繋がりを断ってしまえば、半永久的に人の好意にすがりつく以外に生きる可能性がないと悟った。イルダは恐る恐る遠まきにするように住民共闘の集会にかかわっていった。集会を支えているのは、同じような境遇の女たちだ。地方出身の、文字を持たないオトミ族の女たちや、「第二夫人」もいれば未婚の母も、どの女たちも毎日奇跡的に生きてきた者たちばかり。熱心に語り合い、耳を傾ける仲間を見てその組織の誠実さを感じ、一層引き込まれた。それは、イルダの心の中に起こったささやかな革命だった。

屋上住民は誰もが行き場のないところで戦っていた。カセロ間では、もともと屋上部屋の賃貸しを禁止する合意ができていた。ところが、現実には、どのカセロも貸部屋として補助収入を得ていたが、そうした合意があるため契約書はなく全て口約束で行なわれた。地震によって両者の関係が表面化すると、カセロ側は賃貸契約関係を認めようとはしなかった。そのため、屋上住民は単なる「不法居住者」とみなされたばかりか、政府に対し団地住民としての存在証明のできない根無し草に等しく、被災者救済の要求すらできないという事態に直面していた。政府との押し問答が続くなか、建て前論ばかりの当局の対応に苛だった彼らは、地震一ヶ月目に街頭デモを行った。イルダはこの時、生まれて初めて空気を胸一杯吸って「家をよこせ！」と大声で叫んだ。デモ隊の両脇を

ぴったりマークするパトカーが怖しくて、イルダの心臓は破裂しそうに脈打ち、全身汗びっしょりになった。数キロの行進の中でエステルとベティという仲間を知って初めて打ちとけて話せた。エステルは無駄話をしないしっかり者の主婦で、街頭カメラマンの夫と二人の子供を持ち、組織の活動には献身的な参加の仕方ですごい自分の未来があるという意気込みだ。ベティはメディカル・センターの夜勤専門の看護婦で、子供二人を持つ離婚経験者。ジョーク好きの好感の持てる女性だった。彼女たちと話しながら、イルダは初めて三十一才になるまで自分の人生と呼べるものがあつたのかと自問した。しかし、街頭で出会う人々の視線は冷たく、まるで交通渋滞を招く不穏な集団とでも言いたそうに、罵声を浴びせ車の警笛を鳴らした。

日一日と地震から遠ざかるごとに被災者は孤立していった。倒壊寸前の建物のとりこわし作業が急ピッチで行われ、市内はプラスチック爆弾とブルドーザーの主戦場と化した。それはまるで“遺体”を公衆の面前から回収し、表面の正常をとりつくろふ行為に似ている。そうした「表通り」の正常化とは対照的に、路地裏に一步足を踏み入れると仮設住宅が密集していた。しかし、一般庶民の間には地震の記憶は日々薄れて行く。地震直後、政治的麻痺状態に陥った国家不在を埋めるように、民衆側からの自力の救助活動が燃え上がり、人民権力の台頭すら感じさせる勢いを見せた。当然の成り行きをたどっただけの話だが、政府がおそまきながら復旧作業の主役となると、民衆の連帯の波は急速に引いてしまった。そして、それに追い打ちをかけるように建築資材の高騰や家賃の値上げが地震後の社会的現象として舞い上がった。その上、手のつけようのないインフレが市民を襲って誰もが他者へのゆとりをなくしていった。被災者とそうでない者との間に深い溝ができたばかりか、路地裏に「隔離」された被災者を取り巻く社会的雰囲気は敵対的にすんなった。政府はむしろ、地震直後に起こった被災者に連帯する民衆の波が、すでにあつた経済危機下の民衆の不満と連動して襲いかかるのを恐れた。だからこそ救援活動の全てを自らの管理下に置くことを急務としたのであり、それがまた、政府にとっての「正常化」という言葉の意味でもあつた。被災者と民衆をひき離し孤立させることも、この正常化のひとつの成果であつたように思われる。

とは言え、与野党の政治的思惑をはねつけ独自に結束する被災者団体（三十五組織、三万人）は、政府の地震復興行政にとって手ごわい相手だった。トラテロルコ屋上住民に対して当初、メキシコ市郊外の住宅を提供するとの提案が出された。そこには、地震を契機に都市心臓部に巣くう貧民層を市郊外に「移転」させようという政治的意図があつたことにもよる。そのとき政府が提案した低利の融資による住宅供与案も、實際上、屋上住民には非現実的な話だった。最低賃金の約三倍、十五万ペソ（当時約五万円）以

上の定期所得者を対象とするもので、最低賃金以下の収入しかない彼女らの現実が当局には一切理解されていなかった。エステルの場合、この政府融資に応じて、一度は市郊外に住宅を確保したものの、毎月収入の四十パーセントを返済した上、市内までの交通費や通勤所要時間を考えると、生活は今まで以上に苦しく、再びトラテロルコに戻らねばならなかった。

市内に住居を、という一点に要求を絞ったトラテロルコの屋上住民のたたかいは、がれきと粉塵の漂う二月、五ヶ月間にわたる対政府交渉の末、やっと地震被災者として正式に認定され、三文化広場のテント村をたたんで仮設住宅への移転を達成した。五ヶ月間のたたかいののちに勝ち取ったものは表面的にはわずかに正式認定というにすぎないが、それは屋上住民が政府の被災者向け住宅供与計画の対象として認められ、実現にむけて一步踏み出したことを意味した。そして、社会の最低辺にうごめいた被災者が自力で偏見をはね返し、人間らしさを求めてはい上がろうと戦うドラマの重要な一コマである。

## 第6章 国際傾聴ボランティア（結びに代えて）

今回、われわれ日本人は、国土的にも、国民的にも未曾有の犠牲・損失を蒙った。最悪の事態は長期化し、特に被災者においては、極限状況は一層深まる。今この最悪の状況の下でボランティア、就中傾聴ボランティアへの期待と要請は今後、量的にも質的にも、強まる。一つには、人間をよりナイーブな存在と見做す必要がある。この災禍の規模においては経済優先的存在と定義することは不可能となる、ということ。つまり、人間と自然との関係が根底的な変化を迫られている、ことだ。個人的な経験から言えることは、文化の異なる他所者との「語り合い」によって、「ある面で」（という限定付きで言うが）開放的になれる。なぜなら、生活感が抜けて話しが「話し合い」に異化されるからだ。一種の逆「旅の恥はかき捨て」的な効果が見込まれる。日本人同士ですらそのような効果があるなら、外国からの他所者の話者に対しては尚さらである。その非日常性は強まる。外国語に対しては、自分の内面に意識的にならざるを得ない。「恥のかき捨て」のよい面に着目させるところが傾聴ボランティアにはある。今後、日本発の新しい発想のボランティアとして、「国際傾聴ボランティア」の形成が考えられる。東日本の被災者への支援のあり方が、日本という極地性に限定するのではなく、地球規模での支援モデルを展望する契機となす、ということが今求められていることでもある。

（続く）

**註**

註1 〈la herencia màs inapreciable del cristianismo〉, 〈el hombre es los hombres〉 拙文(駿河台大学論叢第36号〈2008〉, 115, 123頁) 参照のこと。

〈「ひと茎の」と訳した un は、数詞の一でも不定冠詞の男性単数形でもありうる。数詞として「人間は一つの葦」でも直訳にすぎるので、「ひと茎」とした。ただしこの日本語を逆に日本語を仏訳すると、un brin de (一本の) という句を入れなければならないことになる。それが原文にない以上、「ひと茎」という言葉には、原文では日本語の場合ほどの重みがかかっていないことを了解していただきたい〉 前田陽一著

『パスカル〈考える葦〉の意味するもの』中公新書 1968 128頁

註2 「つつみ (comprendre)」という動詞、この動詞は、その語源のラテン語以来「含む、包括する、包む」という意味の原義と、「わかる、理解する」という意味の転義とが並行して用いられている。〈前掲書、136頁〉